

日本語の諺と慣用句

アリレザ・レザイー

1. はじめに

言葉は人間にとって、他の人とコミュニケーションを取るための道具であるが、それは時代によって変化し、多種多様な言葉が生まれる一方、いつの間にか消えていくものも少なくない。1年間日本に留学することになってから、何について研究したらいいかさんざん考えた挙句「日本語の諺と慣用句」というテーマにした。もちろんそれには幾つかの理由がある。私自身にとって、誰かと話す時、話すだけの価値がある話をしたいと思ったり、相手を感動させることも大事だから、いつも無意識のうちに様々な表現の中から一番いいものを選んでいく。ここで忘れてはいけないことだが、そのせいで私は時々難しい話し方をしているとよく言われた。子供の頃から家の温かい雰囲気の中で父親から聞いた諺は今でもよく覚えている。お父さんはどうして話の端々でこんなに上手く適切な諺を使えるのだろう、とよく思っていた私は、ああ、私も父のように諺を交えながら話したいものだと思ってきた。時々ほんのいくつかの言葉でできた諺のほうがどんな話し方をするより、長談義をするよりも強いと感じる。

というようなわけで、せっかく日本語を勉強しているのだから、できるだけ日本語の諺の世界を知る為にこれを専門の研究テーマとして色々調べようと思った。ペルシャ語の有名な言葉にこのようなものがある。「よく考えて、適当に短くしてから口にする話は真珠のようである。」

2. ことわざとは

ことわざはその国の文化を映す鏡である。つまり、その国のことわざはその民族の考え方を示す。しかし、ことわざという概念は、果たして民族や言語の相違を超えて共通するものであろうか。外国のことわざを読むと、確かに幾分違和感があり、抽象的かつ教訓的な印象を抱くことが多いようだ。もちろん感じ方には個人差があり、また対象となることわざの選択の問題もあるから、比較するのは容易ではないが、ことわざに対して人は様々なイメージを持っていると思われる。

ことわざは、個人がある状況、ある局面で瞬時に判断し、最も適切な言葉を引用すると効果があげられる。結婚式の披露宴のスピーチのようなフォーマルな場面ばかりでなく、日常インフォーマルな場面でも、親が子に、先生が学生に、上司が部下に対して使

う。その基本的な意味は、教訓的、伝承的なものであるが、風刺、皮肉、切り返し、強調、確認に使ったりする。こうしたことわざがちゃんと機能するためには、そこに含まれる一つ一つの意味内容を適切に引用する者が自分のものとしていることが必要である。そうなっていてこそ初めて適切な時と場所が判断でき、引用することわざを正しく理解してもらいやすくなる。そして、受け手も十分その意味を理解していれば効果はいっそう大きくなる。

「生活の知恵としてのことわざやいいならわしが村の暮らしの中で、大きな役割を果たしてきたことは、今更言うまでもない。近年技術の革新、経済の進歩、そして情報機器の普及は、これらのことわざを、かつての主役の座からわき役へと追いやった観があるにしても、ことわざのもつ真実や特性-軽妙さ、率直さ、素朴さ、庶民性、説得力、ユーモア「しゃれ」-といったもののまでが消え去るものではない。たとえいくつかの時代、表舞台から遠ざかるとしても、幾百年もの間、先祖たちが培ってきた生き方への信条であり、規範であってみれば、これからは貴重な文化遺産として長く温存し、温故知新の方途として役立てるべきではなかろうか。」（星克美編。村のことわざ辞典）

ことわざは、古くから口移しで語り継がれてきた「言葉の教科書」である。ことわざの世界を覗いてみると、わたしたちよりずっと前の時代に暮らしていた昔の人々は、自分たちが体験したことを他の人にも分かってもらえるように色んな方面で様々なことわざを作ってきたことが分かる。多くの辞書などで「ことわざ」（漢字では「諺」と書くのが一般的である）を調べてみると、「昔から使われてきた教訓や風刺」と説明されている。諺で言われていることのすべてが否定できない事実だとは言いきれないが、その殆どは聞いてみると「なるほど」と感じさせられる。

3. ことわざと慣用句の定義

結論から言えば、ことわざに定義はない。ことわざ辞典に記載されているからことわざで、記載されていないからことわざではないと言えるわけではないし、文部省か何かが定義、基準を示し、その基準にのっとってことわざの承認をどこかの専門機関が行っている訳でもない。そういった意味で言えば、ことわざというものは、非常に曖昧なものであると言える。広く認知されて、昔から使われている教訓めいたものは、全てことわざだと言っても間違いではない。どこの地方でも現在も多くの教訓めいた「言い伝え」というものがある。お年を召した人達にたずねれば、その地方独特のものを一つや二つは教えていただける。そういった地方限定のものも、ことわざと言えるだろう。ことわざに関する多くの書物の冒頭に述べられていることわざの定義や概観をいくつか挙げてみよう。

- 「その社会に生活する人々の共通感覚の上に存続している言語伝承であるから、個々が全く個々で無関係ならば、諺など存在しようがない」（池田弥三郎。暮らしの中のことわざ）
- 「長い間の人間の体験によって積み上げられた、よりよく生きていく為の知恵の結晶である」（針原孝之。ことわざの基礎知恵）
- 「人間生活における、色々の真理について、鋭い批評感覚でズバリとした発見をし、それを鮮やかな言語感覚でピタリと表現する。その最初の一人はやはり特定の天才かもしれないが、そうした発見と表現を、人間生活における真理として位置づけ、その意味を深めてゆくことは、もはや一人の天才のよくする為事ではない。無数の人々、つまり民衆といわれるものの、ながい間にわたっての、判断と愛情と、場合によっては憎悪とを通して、はじめて、民衆の中を生きてゆく資格を与えられる。」（稲垣達郎監修。故事、成語ことわざ辞典）

ところで、慣用句とことわざは、どこが違うのだろうか？慣用句とは「二つ以上の単語や語句が組み合わせたり、独特な意味を持つもの」である。ことわざも慣用句だと言えるし、逆に慣用句もことわざだと言えないこともない。

具体的にある表現を挙げて、それがことわざかどうか問うと、人によって結論は違うが、比較的はっきりした反応が返ってくる。しかし、ことわざとは何か、と改めて問われると、専門の研究者でも答えに窮してしまうかも知れない。「慣用句」はことわざほど価値のある内容を有するものではない。語句が比喩的、象徴的に用いられていることもあるが、全体として単なる連語句を超えて、派生的な意味を持つにいたった成句である。慣用句の種類は以下の通りである。

-直喩的慣用句：

形式上直喩というのが普通のものは、「・・・（の）よう」「・・・（の）思い」「・・・（ん）ばかり」などの形のもので、「大船に乗ったよう」「地獄で仏に会ったよう」など、いわゆる目的語と動詞による句に「よう」のつくかたちのものをはじめ、名詞に「のよう」のつくかたちのものなどもこれに入れられる。つづいて、「死ぬ（ような）思い」「藁にもすがる思い」などや、「泣かんばかりの」「水もしたたるばかりの」などがあげられよう。

「尻に火がつく」「口角泡を飛ばす」なども、これに準じるもので、簡単に「よう」「ばかりの」などをすぐあとにつけて使うこともできる。

-隠喩的慣用句：

成句のなかの語が、原義から派生した意味、象徴的意味を持っていたり、その成句全体としてそのような意味を持っているとき、これを隠喩的慣用句と言うことができる。

「肩を持つ」「馬が合う」「裏目に出る」「猫ばばをする」などが、まずあげられる。「肩も持つ」は、味方をする、一方に力を入れるというような意味で用いられ、原義の「肩」や「持つ」の意味は生きていない。「手を焼く」はもてあます、閉口するという意味で用いられ、原義の「手」「焼く」の意味が生きていないのと同じである。この類のものには漢語を含む一群があって、やや特徴的と言えるだろう。諺にも漢文系のものが少なくないが、現在では一般に使われることはそれほどない。隠喩的慣用句においても、同様の傾向があるかもしれないが、諺よりは、漢語がまだ使われるように見える。

これらのほか、身体語彙を含む隠喩的慣用句もあって、形容詞、形容動詞を後部要素とし、連帯法として用いられるもののおおくも一部をなすと思われる。

「肩身が狭い」「顔が広い」「腹がくろい」

一般的なことわざの定義の殆どは「先人の知恵を表す短い文」である。これは或る程度認めることができる定義だが、「短い文」と「知恵」の間にはちょっと意味的なずれが感じられ、その知恵とはどんなものかと問いたくなる。

『日本国語大辞典』の諺の欄では、「昔から世間で広く言い習わされてきたことばで、教訓や風刺などを含んだ短句」といってるし、『日本民族資料辞典』では「簡単な言葉で効果的に相手を納得あるいは屈服させようとする、一つにまとまった軽妙な文句である」と定義付けをしている。一方、藤井乙男は、『諺の研究』のなかで、「コトワザは為業（しわざ）に対する言葉にして、イイグサという程の義と見ゆ」と述べている。柳田国男は、『民俗学辞典』において、ことわざを「言語の技術、コトワザの意」と説いている。ここで「四字熟語」というものについても触れておこう

四字熟語は本来、ことわざと同じように昔から伝えられてきた言葉で、四つの漢字のみで構成されているものを指す。とは言え、これも実は正確な定義というものはない。非常に曖昧だ。例えば、「四つの漢字で構成されている言葉であれば、なんでも四字熟語である」という解釈もあるし、「原典が明確になっているもののみが四字熟語だ」という意見もあり、人によって解釈はさまざまだ。だから、四字熟語、という言葉自体、辞書や辞典に掲載されていない場合がある。なぜかといえば、ひとえに定義が非常に曖昧だからだ。

四字熟語という言葉は広く市民権を得ている。中学校や高校の入試問題にも出題されているし、新聞などでも四字熟語は頻繁に使用されている。「一期一会」や「温故知新」などといった言葉は、すでに四字熟語という範疇に入ると思われており、その認識に疑

問を呈する人はほとんどいない。結局、「四字熟語」という言葉が一般にどう認識されているかを論じても、あまり意味がない、ということである。大事なのは四つの漢字で構成されている言葉とその意味だろう。

4. 諺の種類

分類は決まったものではないから、あることわざがどの種類に入るか、考え方によって違ってくる。大藤時彦は、『世界大百科辞典』の「ことわざ」の項で、ことわざを「その機能によって、攻撃的諺・経験的諺・教訓的諺・遊戯的諺の四群に識別」している。これを参考にして分類すると次のようになる（本研究では、特に外国人の読者の為に諺のだいたいの意味も書いた）。「経験的諺」と「教訓的諺」は区別が難しい。なぜなら教訓を含まない純粋な経験などないように思うからだ。従って本論では二つを一つにまとめている。

（１）批判的事ことわざ、（２）教訓的事ことわざ、（３）娯楽的事ことわざの三つに分類する。

（１）批判的事ことわざ（攻撃的事ことわざ）

人と人が争う時（争うというより、口喧嘩をする時）、武器として使われることばが出現する。簡潔に敵の弱点をつき、容赦なく言い放つことわざである。つまり、人間のマイナス面をえぐりだし、我々をぎよっとさせる。生活の知恵、反省の材料ともなる。（大藤はこのように説明するが、取り上げられている例の殆どが攻撃というよりは強烈は批判だろう。

-口は口、心は心

-学者むしゃくしゃ（学者は気難しくて、難解なことばかり言うものだということ）

-うさぎも七日なぶればかみつく

-地蔵の顔も三度

-仏の顔も三度

（いかに温和で慈悲深い人でも、たびたび無法を加えられれば、しまいには怒り出す）

-馬鹿の一つ覚え（一つの事だけを覚えて、それをどんな場合でも得意になってふりまわすことをあざけっている言葉）

（２）教訓的事ことわざ

一人の人間をやりこめることわざが批判的なことわざであるのに対し、広く万民にものごとの道理や知識を教えようとするのがここである教訓的なことわざである。人生について諭すものである。これをさらに分類することもできる。

・格言的、処世訓的なもの

- 言いたいことは明日言え（たと言いたいことがあっても、その場ですぐに言ってしまわずに時間をかけ、じっくり考えてから言えということ）
- 怨みほど恩を思え

・生活訓：格言に近いが、もっとごく普通の日常生活を律するようなもの

- 早寝早起病知らず
- 急ぐな休むな

・一般的道理：きわめて平凡なあたり前のこと

- これこそことわざの真骨頂。
- 済んだことは仕方がない
- 無い袖は振られぬ（実際に持っていないものはいくら出したくても出すわけにはいかず、どうしようもないということ）

・生活の実態：人間生活のあからさまな実態を述べながら、我々の生き様に忠告や戒めを与える

- 死んだら褒められる（思い出は亡くなった人を美化するということ）
- 泣く子は育つ（健康な子のたとえ）

・人情の機微：人間の弱さ、愚かさ、ずるさ

- 我が田に水を引く（我田引水）
- 去る者は日々にうとし（離れてしまった人の思い出が薄れてしだいに疎遠になったり、忘れていくということ）

（３）娯楽的なことわざ（遊戯的なことわざ）

相手を怒らせもするが、自分や味方を笑わせる要素もことわざには潜んでいる。当の本人にしてみれば、厭（いや）なことでも第三者の立場に立てば笑い転げる内容の意味を含んだ諺が次の表現である。皮肉や風刺やからかいの響きある。

子供たちのことを愚痴をこぼす親に誰かがこの一言、

-瓜（うり）の蔓（つる）に茄子（なすび）はならぬ（平凡な親からは非凡な子は生まれぬ）といえば、笑いのうちに愚痴はもうでなくなるだろう。

-蛙の子は蛙

強情っぱりな人が虫を見て黒豆だと言い張る。そのうちに動き出してもなお黒豆だと言い張ったという時の表現。

-這っても黒豆

だじゃれになったものもある。

-月とすっぽん（《月とスッポンとは丸いところは同じだが、全くかけはなれているところから》二つのものの間に非常に差のあることのたとえ）

-綱渡りより世渡り

-仲立ちより逆立ち

-炬燵（こたつ）の前で当たり前

このように、本来の意味機能を失い、ただの駄洒落となってしまうてもまだ好んで使う意識の奥底にはやはり、諺としての機能が見え隠れしているのではないだろうか。

5. ことわざの魅力とは

ことわざを会話の潤滑油として使用するのは、何も難しいことではない。現に多くの場所でことわざは有意義に使われている。例えば、結婚式。結婚式の日には雨に降られると、司会者や挨拶をする親族の人達は決まって「雨降って地固まる」のことわざを引用する。多分多くの日本人は、このことわざを聞いて、自然に納得してしまう。

なぜこのことわざが結婚式の日には雨が降ると呪文のように使われるのかといえば、昔から使われていて、広く認知されているこのことわざを使うことにより、結婚をする当人達にとっても式に出席した人達にとっても、「雨が降ったからといって二人の人生が変になるようなことはない」ということを、印象付けるためである。

もし、「雨降って地固まる」を引用せず、二人の門出にふさわしい言葉で挨拶をまとめ上げようとする、それはもう大変な文章力が必要であり、十分な説得力を持ちながら力説しなければならないだろう。

結婚をする当人達にとっては、新しい門出な訳だから、やはり結婚式は晴れ晴れとした晴天であって欲しいものである。しかし、実際には雨が降ってしまう場合もある。結婚式だけに「雨降って地固まる」は使われている訳ではない。入学式や卒業式の挨拶などにもよく使用されそう。

では、なぜ人はことわざを引用されると、自然に納得してしまうのだろうか？ それは、ことわざ自体が第三者話法の特長を兼ね備えているからである。第三者話法というのは、「〇〇ということ、自分が言っているのではなく、他の人が言っていることですよ」と相手に伝えるための話法のことである。

例えば、人を怒ったり、誰かに文句を言ったりする場合、お互い面と向かって言い合えば必ず角が立つ。また、どちらかが一方的に聞き手にまわったとしても、やはり聞き手は嫌な印象を相手に持ってしまうだろう。

そうした時に、自分の主張を「〇〇さんも、△△さんも言っていましたよ」というように、「まるで他の誰かが主張していることなのですよ」と、相手側に伝えると、意外なほど角が立ちにくいものだ。この話法の重要な点は、「世間一般を自分の味方にする」ということだ。自分一人が主張しているのではなく、皆が主張していることなのですよ、と相手に伝えることに大きなメリットがある。第三者話法についてアレコレといってしまうと、ややこしくなってしまう。要するに、コミュニケーションの手段のひとつとして、色々な人に共通の認識として示して、話をスムーズにし、有意義に活用できる、ということである。

6. 知らず知らずのうちに使っていることわざ

私達が知っていることわざというのは、一体どのくらいあるのだろうか。年代によっても異なるが、多い人で50、普通の人であれば20〜30程度と思われる。もちろん、うろ覚えのものもあるだろうし、意味はよくわからない、といったことわざもあるだろう。ところが、日常生活の中で使われている言葉の中に、日本人が知らず知らずのうちに使っていることわざが沢山ある。紹介しよう。

-揚げ足を取る（《相手が蹴ろうとしてあげた足を取って逆に相手を落す意から》

相手の言いそこないや言葉じりにつけこんでなじったり、皮肉を言ったりする）

-足を洗う（悪い所行をやめてまじめになる）

-足を引っ張る（他人の成功や前進を陰でひきとめ、邪魔をする）

-当たるも八卦（はつけ）当たらぬも八卦（うらないは当たりもするしはずれもする）

-片棒を担ぐ（いっしょにある企てをする。悪いことをする場合によくいう）

-肩身が狭い（世間に対して面目が立たない）

-業を煮やす（腹立たしさに、心がいらいらする）

-鯖（さば）を読む（得をしようと数をごまかす）

-太鼓判を捺す（証明の為に大きな判を捺すことから、誓って間違いのないことを証明

する意)

- 大黒柱 (転じて、家や団体の中心となり、支えとなっている人)
- 玉の輿 (富貴な身分)
- 竹を割ったよう (さっぱりとした性質のたとえ)
- 馬鹿の一つ覚え (一つのことだけを覚えて、それをどんな場合でも得意になってふりまわすことをあざけっていう言葉)
- 馬鹿も休み休み言え (相手の言ったつまらない事、いい加減なことをたしなめていう語。馬鹿を言え)
- 火を見るより明らか (物事の道理や結果などがきわめて明白で、疑う余地のないことにいう)
- 馬子にも衣装 (誰でも外面を飾れば立派に見える)
- 駄目押し (わかりきったことを、念のために更にたしかめる。念を押す)
- 出たところ勝負 (ばくちで、出た賽《さい》の目で勝負をきめるように、あらかじめ手段をめぐらさないで、その時の状態でことをきわめること。成否を運にまかせてともかくやってみること)
- 手も足もでない (施す手段が全くなくて困りきる)
- 手を拱 (こまね) く (手出しをせず、傍観している)
- 天狗 (てんぐ) になる (高慢なこと)

これらはほんの一例である。もちろんもっとたくさんのことわざが、日本人の日常会話の中で知らず知らずのうちに使われている。上記のことわざは一部を除いて出典がはっきりしていない。いわば、昔から口から口へ語り継がれてきたものばかりである。

また日本人の間で人気のある諺には以下のものがある。

- 一石二鳥
- 口はわざわいのもと
- うそも方便
- 早起きは三文の得
- 昨日の敵は今日の友 (世の中の関係の変わりやすいことのたとえ)
- 能ある鷹 (たか) は爪を隠す (本当に実力のあるものは、やたらにそれを現さないものだというたとえ)
- 井の中のかわず大海を知らず (考えや知識が狭くて、もっと広い世界がある事を知らない。世間知らずのこと、見識の狭いことにいう)
- 石の上にも三年 (辛抱すれば必ず成功するという意)

- 備えあればうれいなし（日頃から用意万端整っていれば、何も心配することはないということ）
- 一寸先はやみ（ちょっと先のことも全く予知できないことのたとえ）
- 灯台下（とうだいもと）暗し（灯台の真下はあかりが暗いように、手近の事情はかえってわかりにくいものである）
- 親しき中にも礼儀あり（親密過ぎて節度を失うのは不知のもとだから、親密にしても礼儀を守るようにせよ）
- 百聞は一見にしかず
- 雨降って地かたまる（変事があってかえって前よりよく基礎が固まることのたとえ）
- 人のふり見て我がふり直せ（他人の性行の善悪を見て、自分の性行を改めよ）
- 良薬口に苦（にが）し

「当たるも八卦当たらぬも八卦」の意味を知っている日本人は多いだろう。日常的に良く使うが、「八卦」という漢字を書ける人もほとんどいないこのことわざは多分学校では教えてはくれない。というより、教科書には出てこない。また、「馬子にも衣装」も、「馬子」という漢字がすぐ出る人は少ないように思える。これらのことわざは、子供の頃から親や兄弟、友達などとの日常会話の中で自然に覚え、ことわざという認識がないまま使われているものである。本来は、こういったものが「本当のことわざ」であり、ことわざが「言葉の教科書」と呼ばれる由縁だ。

7. ことわざを信用していいか

答はNo（ノー）である。ことわざを100%信用してはいけない。なぜなら、そもそもことわざは、大衆文芸である落語やコントの台本と同類の物と言って良いものだからだ。では、どの程度信頼すればいいのか？「なるほど」と思える程度で良い。

ことわざは本来、口移しで語り継がれていく物である。言葉が時代によって変化していくのと同じように、ことわざもその時代にあった形で変化していくはずだ。読み方は変わらずとも、意味が変化したことわざもある。

「信用できないものをおいそれと使えるか！」と考える者は多いだろう。しかし、そう考えながら、日常会話の中では知らず知らずのうちに、自然とことわざを使っているし、その場その場の状況に応じた使い方をしているのである。「あなたは自分が使っていることわざの本当の意味や使い方を知っていますか？」と問われたらどう答えるだろうか。

「100%間違いなく使っている」と答えられるのは、国文学者か相当なことわざマ

ニアの方だけだろう。大多数の人が、「100%の自信はないけれど使っている」と答えるだろう。なぜなら、会話の中で自然と出てきたことわざに、いちいち揚げ足を取って指摘する人はほとんどいないし、会話がスムーズに行われれば、別段問題はないからである。

ことわざの本来の姿は「教訓」である。つまりは先人達が残した道しるべである。しかし、ことわざにはそれとは違った「風刺」という要素も入っている。「ああ言えばこう言う」的な側面も持っているのである。上でも述べたが、ことわざは会話の潤滑油である。意味がどうだ、使い方がどうだ、というのはたいした問題ではない。

最後に日本のことわざの色々な例を述べておこう。

8. 比べると面白いことわざ

－「一石二鳥」VS「二兔を追うものは一兔をも得ず」。一石二鳥は、既により結果がでていることであるから、当然前者が勝る。一度成功したからといって、いつも前者を狙ってもそううまくはいかない。

－「山椒は小粒でもぴりりと辛い」VS「大男総身に知恵が回りかね」前者は、小柄な人を直接慰める言葉のようである。後者は、大男をおとしめることによって、小柄な人を慰めているように感じられる。

＊山椒（さんしょう）みかん科の落葉低木

＊小粒（こつぶ）からだの小さいこと

＊総身（そうみ）全身

どちらも小さい者が優れていると言うのだから意味は類似している。

－「好きこそものの上手なれ」VS「下手の横好き」。天才でさえ、「99%の努力と1%のインスピレーション」といわれる。天才ではない人が上手か下手かは、努力次第。下手の横好きは、好きの度合いと、努力の程度が、低いので、上手になれない。

－「善は急げ」VS「急がば回れ」。善か否かはっきりしていればよいが、余裕が無い場合によく使われると考えられる。余裕が無く、急ぐと、事を仕損じることになる。

－「死んで花実が咲くものか」VS「玉となって砕くとも瓦となって全（まつま）からじ」後者は、名誉のために死ぬということだが、残された人のことを考えると独りよがりのものである。やはり死んでしまっただけでは何にもならない。みずから死を選ぶのは、よくよくのことがあってもするべきではなく、衝動的に自殺するなんていうのは本当に悲しいことである。

－「先んずれば人を制す」VS「急（せ）いては事を仕損じ」 余裕を持って人に先行することは、急ぐことではない。出遅れるため、急いで事を仕損じるのであるから。

最後に我々のことわざに対する信頼度を低くさせる意味、考え方が反対の例を幾つか挙げてみよう。

- 嘘も方便 V S 嘘つきは泥棒のはじまり
- 蛙の子は蛙 V S 鷹が鷹を生む
- 渡る世間に鬼はない V S 人を見たら泥棒と思え
- 柳の下に泥鰌（どじょう）はいない V S 二度あることは三度ある
- 酒は百薬の長 V S 酒は気違い水
- 田舎の学問より京の昼寝 V S 京に田舎あり
- 徳をもって怨みに報ゆ V S 目には目、齒には齒
- 兄弟は他人のはじまり V S 血は水より濃い

解説：血筋は争えず、他人よりも血縁の人とのつながりの方が強い)

- 当たって砕けろ V S 石橋は叩いて渡れ

解説：（成る成らないにかかわらず敢えて行い、駄目ならそれでもよいという感覚でことをせよ）（堅固な石橋を叩いて、堅固さを確かめてから渡る。用心の上にも用心するたとえ）

- 衣食足りて礼節を知る V S 武士は食わねど高楊枝（たかようじ）

解説：（民は、生活が豊かになって初めて、道徳心が高まって礼儀を知るようになる）（武士はものを食べなくても、食べたようにふりをして楊枝を使って空腹を人に見せない。武士の清貧に安ずること、気位〔きぐらい〕の高いことをいう）

本当だったら怖い！

- 顔をつぶす（面目を失わせる。名誉をきずつける）
- 手を焼く（どうあつかったらよいか、しまつにこまること）
- 骨身（ほねみ）を削る（体がやせて細るほど一所懸命にことに当たる）
- 真綿（まわた）で首をしめる（直接〔ちよくせつ〕ガンガンやらず、それとなく遠回しにジワジワとせめたり、痛めつけたりすること）

何のたとえか

- 穴（あな）があつたら入りたい（はずかしくてたまらないこと）
- 色めがねで見る（人やものごとをありのままに見せようとせず、かたよった見方をすること）
- 後ろ髪（がみ）をひかれる（あとのことが気になって、前にすすみにくいこと）

-うどの大木（たいぼく）体が大きいだけで、あまり役にたたない人のことをいう）

道具や品物を使ったたとえ

- 臭いものに蓋（悪事や醜聞などを他人に知られないように一時的なででてで隠す）
- 筆（ふで）が立つ（文章がうまい ことをいう）
- 眼鏡にかなう（目上の人にみとめられる、気にいられること）

食品を使ったことわざ

- 油を絞る（厳しく叱ってとっちめる。こっぴどく責める）
- お茶をにごす（いいかげんにその場をごまかす）
- 花よりだんご（名より実利を尊ぶこと）

どうやることかわからない

- 大目玉を食う（ひどく叱られること）
- しっぽをまく（（相手のほうが強いと知って）負けて逃げることをいう）
- へそが茶をわかす（おかしくてたまらないことをいう）

動物にたとえたことば

- 犬の遠ぼえ（臆病な者が陰で虚勢を張り、または他人を攻撃することのたとえ）
- 腐っても鯛（たい）（ほんとうにすぐれているものは、少し 古くなっても、だめになっても、やはりすぐれているというたとえ）
- はきだめに鶴（（「はきだめ」はごみをすてる場所）つまらぬところに、きわだつてすぐれたものが表れたたとえ）

植物を使ったことば

- 根も葉もない（全く根拠がない）
- 花をもたせる（相手を立てる。相手に名誉や栄光をゆずる）
- ひょうたんから駒（こま）が出る（思いがけないことがおきたという たとえ。とくに 冗談半分にいつていたことが、ほんとうになったようなとき）

悩んでいる時のことわざ

- 明日は明日の風が吹く（あしたは又別のなりゆきになる）
- 後は野となれ山となれ（現在さえよければ、これから先はどうなってもかまわない）
- 長いものには巻かれよ（目上の人や勢力のある人には争うより従っている方が得であ

る)

努力をすすめることわざ

- ローマは一日にしてならず（何事も多大の努力をしなければ成し遂げられない）
- 好きこそ物の上手なれ（好きなればこそ、飽きずに努力するから、遂にその道の上手となる）
- 習うより慣れよ（物事は、人に教わるよりも自分で直接体験していく方が身につくということ）

現象を使ったことわざ

- 嵐の前の静けさ（変事の起こる前の、一時の無気味な静穏さのたとえ）
- 雲泥の差（比較にならないほどの大きな差異）
- 「風上（かざかみ）におけない（「風上」は風がふいてくる方向のこと。風上にくさいものをおいたら、におってたまらない。そういうものは風上にはおけないのだ。ひきょうな者、ずるい者、悪い者をさげすんでいうことば）
- 水かけ論（ろん）
両方で水をかけあうということから、おたがいに あいてのいうことを聞こうとせず、自分の都合のいいことばかり言い合って、結論が出ない言い合いのことをいう。

9. ペルシャ語のことわざ（紹介）

ペルシャ語の諺の世界を覗いてみると、ペルシャ語独特の考え方を表す諺の数は、他の国の諺と考えが共通している諺の数より多い。ひじょうに詩的な言語であるペルシャ語は、詩や表現のための言語だともよく言われる。従って脚韻や頭韻が使われる諺も多い。長い歴史のあるイランではある時代の出来事がきっかけになって、何か諺を作ろうと、作られた諺も少なくない。こんなペルシャ語の諺を外国語に直す為には、イランの古い歴史をさかのぼらなければならない。諺を実際に作った「民衆」は、どうやってこんなにたくさんの諺を作れたのか誰にも分からないのだが、やはり傑作のようである。

そこで、「女性」、「友」、「親子」等のテーマを中心にペルシャ語の諺集に掲載されている諺を少し紹介しよう。

「女」

世界の国々の諺をざっと見てみると、「女」を褒める諺はないとは言えないけど、本

当に少ない。ペルシャ語の場合もそうだ。

例えば

「悪い女は、瓶の中に詰めても、自分がしたいことをする」

「子を生む前は魅力的だが、子を生んだ後はただの母親」

「がみがみ言う女（口やかましい女）は首輪のない犬と一緒にである」

「がみがみ言うのは夫をなくした女だ」

「女は20歳になったら、同情してあげるべきだ」（女は、自分の年齢を隠そうとするものである。女たちがあまり聞かれたくないのは、年齢のことである。年をとるとともに顔等にしわができるというのは女にとって何よりもつらいものなのであろう。）

「壊れた壁、野良犬（のらいぬ）、がみがみ言う女は避けたほうがいい」

「嫁入り道具のない女には気取ることなど似合わない」（イランの社会では、昔からずっと、現在でも、階級差が大きい。誰それが由緒正しい家柄だとか、下賤な家の生まれだというようなことがよく耳に入る。イランの結婚文化では家の主な家具は女性の家族が買わなければならない。気取るとは由緒正しい家の娘がするものである）

女をほめる諺はあまりにも少ない。

例えば

「女は不幸と一緒にだ。しかし、不幸のない家族はない」

「妻のいない人は心が落ち着かない」

「妻は家の光」

「妻に手を上げる夫は、神に呪われる」

夫婦喧嘩に関しては、例えば、「夫婦喧嘩を信じると馬鹿を見る」、「夫婦喧嘩は人生の塩」（イランの食文化では、よく使われる調味料は塩なので、塩は大事にされる。この諺は喧嘩のない人生は塩のない料理のようだという意味である）

「友」

「同じにおいがしないのに、ロバと馬は同じ場所にいると、必ず性質が同じになる」

「バカな友より賢明な敵」

「みんなの友は誰の友でもない」

「友は泣かせるものであり、敵は笑わせるものである」（本当の友達は私の弱点などを注意してくれるものである）

「バカは、バカを見ると、気に入る」

「鳩には鳩、鷹には鷹」

「めくらはめくらを探し、水は溝を探す」

「親子」

「礼儀を知らない子は第6の指のようで、切ると痛い、切らなければ醜い」

「人の子は、たとえ金の首輪をあげても、自分の子にならない」

「ひとりっ子はバカになる」

「爪から肉はとれない」

「欲」

「片手で二つのスイカは持てない」

「自分の敷物の長さに合わせて足を伸ばせ」

「光る物を盗みたい者はまずそれを隠す為の井戸を掘らなければならない」

「麦を味わったことあるロバはワラを食べない」

「まずは生んだ子を育てよ」

「欲ばりの薬は墓の土」 （イランは火葬ではなく、土葬である）

「男」

-家の外を明るくし、中を暗くするのが男

外に出ると、笑顔を見せてみんなに好かれる男性でも、自分の家では暴力を振るったり非難ばかりして家庭の雰囲気壊す男が多い。

-人生の半分は経験を重ね、残りの半分で、それを生かす

-40を過ぎてから男は初めて男になる

女と比べ、男の出世は年を取ってから始まる。殆どの女は年を取ったらもう若いころの魅力とかアピールするものはなくなり、家庭に入って家事に専念するだろうが、男は若いころ励んだことなどがどんどん認められて、出世することを言う。

-男はお金を借りた人を見ると生理になる。（体の調子が悪くなる）

-男はズボンが2着になったら新しい奥さんをもらおうと考える

結婚したばかりのころは、財産などはそんなにないが、奥さんのおかげでどんどん出世してくると、恩を忘れて新しい奥さんをもらいたくなる。イランでは一夫多妻が法律上認められているから、おそらくこの諺はイスラム諸国以外の民族の男性には当てはまらないだろう。

-死刑になる間際でも奥さんに花を求められるのが男

日本語の、「わしもくん」の女版。夫がちょっと出かけようとしたら、すぐ奥さんに

どこへ行くのか聞かれたり、帰りに何かを買ってきてとか言われる。夫が亡くなると、花がいっぱい咲いている天国へ行くと思い込み、しつこい奥さんは夫が死刑になる時でもお願い事をする。

「口」

言葉は言葉から

人間の会話は、一つの言葉から始まるので、相手のことばは私の言葉の元だという意味。ちょっと汚いが、同じ考え方をする諺に、「糞を踏まない限り臭い匂いはしない」というものもある。

-舌はただの筋肉。どの方向にまわすのも簡単だ

自分の言葉遣いは慎まないといけないという意味。

-緑の舌は赤い頭を荒らして徹底的になくす

イランでは緑は「新鮮」、赤は「力」の象徴。

-町の門は閉められるが、人の口は閉められない

昔は町の周囲に他の町から襲われないように長い壁を作る習慣があり、夜になったらその門を閉めていた。人の口はこんなにも小さいのに閉めることができないという意味。

-本当の事は子供の口から聞け

子供は純粹だから滅多に嘘を言わない。時々大人が喧嘩をしているところで子供が思わず口が滑って本当のことを言えば、喧嘩がおさまるかも知れないが、その子どもはみんなに叱られる。

-（口から出る）皮肉はオノで切られるよりずっと痛い

一人の薪を集め売りながら生活していたおじいさんが毎日森へ仕事をしに行っていたら、ひよんな事から一匹のライオンと知り合い、長い間付き合っていた。ある日、おじいさんはライオンに向かって、あなたのひとつの態度を除けばすべて気に入っている。あなたはご飯の食べ方が相当下品だ！と非難した。ライオンはこう言われると、すぐ自分のオノで私の頭をなぐれ、そうしないとあなたに飛びかかって食うぞと脅した。おじいさんはしょうがなくためらいながらもライオンに言われたようにした。ライオンは頭から血を流しながら怒鳴ってたち去った。何ヶ月かして、また鉢合わせしたら、ライオンは頭をおじいさんに見せて、「ほら見なさい、オノの傷はもう治っているが、皮肉の傷はまだ治ってない」と言った。

-うまい話し方をすれば、蛇を巣から引きずり出せる

話し方によってどんなに強い人でもごまかすことができる。

-7人のメクラの娘をわずか一時間で嫁がせる

昔イランでは、両親が娘に夫を選ぶ習慣があり、父親の話し方によって娘が玉の輿に乗ることも可能だった。

-男の言葉は変わらない

昔「モッラ」という有名なお坊さんがおり、彼の名前はたびたびペルシア語の諺に出てくる。モッラはペルシアの伝説的な人物で、実際にいたと思われる。日本で言えば、一休さんにあたるような人物。ある日モッラは年齢を聞かれて20歳と答えた。10年経ってから同じことを聞かれてモッラはまた同じように20歳と答えた。その理由を聞かれたら、「男の言葉は変わらない」、つまり「男は自分の言葉を変えたりしない」と言った。この諺を殆どのイラン人の男は知っており、特に無理をして意地を張る時によく使う。たとえ自分が間違っていると思っても、それを認める勇気がないためこの諺を使う。これに似た諺もある。「男と言葉」。男は何か言って約束したら、それを守るためにとことん力を尽くさないと男と呼ぶに値しない。

10. おわりに

以上、本研究で日本語のことわざの特徴等を少し述べてみた。もちろんどんな国のことわざでも調べようと思えば、何冊もの本を読まなければいけない。それらの諺を果たして我々の子や孫が或る程度使い続けるかそれとも忘れてしまうか、時が証明してくれる。ことわざはどんどん作られてきたが、一瞬のうちにとは言えないが、どんどん消えていく。

ペルシア語の諺ももっとみなさんに知っていただきたかったが、適当な資料がなく、詳しく紹介できなかった。またいつかペルシア語と日本語の諺を比較する機会があればと思っている。

参考文献

宮地裕、「敬語・慣用句表現論」-現代語の文法と表現の研究（二）-

1999年、明治書院

穴田義之・本郷馨、「ことわざ社会心理学」、1982年、

「広辞苑」第五版 岩波書店

www.246.ne.jp/~kotowaza/kotowaza.html

www.kotowaza-world.com

<http://user.komazawa.com/hagi/ko-asobi.html>